

# ドゥルーズとマゾッホ

大西 宗夫

(人文学部人間文化学科)

Deleuze et Masoch

Muneo ONISHI

(Littérature française)

1967年、ジル・ドゥルーズは『ザッヘル＝マゾッホ紹介』<sup>1)</sup>を刊行する。この本において、ドゥルーズは、マゾヒズムの問題をめぐる、フロイトの理論を検討し、精神分析との対話を進めている。70年代にはいて、フェリックス・ガタリと共同作業をするようになると、ドゥルーズは精神分析に対して、性急で全否定に近い批判を浴びせかけるようになるが、ここではじっくりとフロイトにつきあっていて、その意味でこの書物はドゥルーズの作品のなかでも貴重な意味を持つ。

マゾヒズムという語は、1886年にクラフト＝エビングによって作家ザッヘル＝マゾッホの名前をもとに作られたものである。クラフト＝エビングにおいてすでに、マゾヒズムとサディズムとのあいだには関連があると考えられていたが、フロイトはもっと決定的に、マゾヒズムとサディズムは同じ倒錯の受動的側面と能動的側面の差異にすぎず、同じ個人にあらわれるとした。そこからサド＝マゾヒズムという単位が生まれる。ドゥルーズが解体しようとするのは、マゾヒズムとサディズムは相互補足的なものだというこの考え方、そこからくるサド＝マゾヒズムという実体なのだ。マゾヒズムとサディズムの異質性、非対称性を明らかにするために、ドゥルーズはマゾッホの文学作品を読むことから始める。批評 (critique) と臨床 (clinique) が新しい関係にはいられなければならない。また性急な病因論に、差異を浮き彫りにする症候学が先行すべきなのである。そのためにドゥルーズは不当にも無視されがちだったマゾッホの作品を読むことを実践してみせる。そしてマゾッホ的世界の独自性を示し、サディズムとの対比において、マゾヒズムとはなにかを追及していくのである。その議論をたどっていこう。

まずマゾッホとサドの作品における言語の機能の差異がある。一般にポルノグラフィーとよばれる文学は、命令的な台詞とそれに続く猥褻な描写からなるが、マゾッホやサドの文学はそのような初歩的なポルノグラフィーには還元されえない。サドにあっては、そのまま暴力的なものである推論の果てしない展開がある。だがそこには教育学的意図はまったくない。それに対して、マゾッホにおいては、すべてが説得であり教育である。マゾヒストは自分自身の拷問者を、説得し、教育し、養成するのである。マゾヒストは契約を必要とし、サディストは制度を必要とする。サドにはスピノザ的な推論的理性があり、マゾッホにはプラトンの弁証法的想像力があるとドゥルーズは言う。

作品における描写の役割も、サドとマゾッホでは異なっている。サドにおいては猥褻な描写は挑発的要素として不可欠なものであるが、マゾッホにおける弁証法的機能はそれをむしろ排除する。ドゥルーズはサドの文学における「否定」(négation)の二つの次元を区別する。「否定的なもの」(le négatif)は部分的な過程であり、「純粋な否定」(la pure négation)は「総体化する<理念>」である<sup>2)</sup>。それに対して、マゾッホで問題になるのは「否認」(dénégation)である。否認という現象がもっとも明らかになるのはフェティシズムの場合であるが、フェティシストは女性にはペニ

スが欠如しているという現実を認めることを拒む。そして、靴とか毛皮といったフェティッシュは、女性に不在のペニスの代理物となる。フェティシズムは防衛する中性化作用であり、また理想化する中性化作用でもある。女性にペニスがないという事実を否認することで、自己を去勢から守り、女性にペニスがあると信じることで女性を理想化するわけである。フェティシズムなしにマゾヒズムは存在しえない。

だから世界を否定したり破壊するのが重要なのではないし、まして理想化することが重要なでもない。世界を否認し、否認の仕草によって宙づりにして、幻想 (phantasme) の中に宙づりにされた理想に向かって自分を抜けることが問題なのだ。純粋に理想的な根拠を現出せしめるために、現実界の正当さに異議を申し立てる。そうした操作は、マゾヒズムの法学的精神にびたりと一致している。その過程が本質的にフェティシズムへと通じるものである点は、驚くにはあたらない。(…) 主体の一部は現実を認識しているが、その認識を宙づりにしてしまう。ところがまた一方では、主体の別の部分が理想をめざして自分を宙づりにしてしまうのだ。(…) マゾッホの否認の過程は途方もなく進行するので、ついには性的快楽それ自体を対象とすることになってしまう。性的快楽の到来が最大限に引きのばされるので、その結果としてまさに快楽を感じるその瞬間に現実が否認され、かくしてマゾヒストは「セクシュアリテを持たない新たな人間」へと同一化するのだ<sup>3)</sup>。

マゾッホに猥褻な描写が存在しないのは、猥褻性が否認され宙づりにされてしまうからである。

サドとマゾッホの相互補足性の限界はどこで露呈するか。サディズムの中に一種のマゾヒズムが存在し、マゾヒズムの中に一種のサディズムが存在するというのがたしかだとしても、たとえばマゾヒズムにおける女性の拷問者はサディストだと考えるべきではなく、彼女は全面的にマゾヒズムに属し、マゾヒズムを形成する純粋な一要素であるという事実を認めなくてはならない。マゾヒズムに固有のサディズム、サディズムに固有のマゾヒズムがあって、それらはたがいに対応しないのである。

フロイトはサドーマゾヒズムという概念を支持するにあたって、二種類のサディズムを区別していることにドゥルーズは注意をうながす。ひとつは、純粋に攻撃的なサディズムで、その攻撃はいかなる性的快楽とも結びついてはおらず、そこで問題になっているのは支配欲動の行使だけである。もう一方は、快楽主義的サディズムで、これは性愛的サディズムである。この二つのサディズムの中間に、マゾヒスト的体験がある。サディストは、自分が苦しめている他者に同一化し、自らマゾヒスト的に苦痛を享受しているというわけだ。だがこのようにして主張されるサドーマゾヒズムなるものは、たんなる抽象にすぎず、悪い意味での思弁の産物ではないかと考えられる。

ついでマゾッホの作品に登場する三人の女性の問題が取り上げられる。第1のタイプは、異教徒の女であり、「遊女」(l'hétaïre)である。第3のタイプはサディストである。そして、この両端にはさまれた第2のタイプとは、冷淡で苛酷な母性であり、マゾッホの理想像である。マゾッホ的「冷淡」(froideur)に対応するのは、サド的「意気阻喪」(apathie)だが、この両者の差異に注目すべきである。マゾッホの冷淡さが官能性を否認するのに対し、サド的意気阻喪は感情に逆らう。

マゾッホにおける三つのタイプの女性は、バッハオーフェンによって区別された三つの発展段階に対応する。第1は、古代ギリシャの遊女的な段階で、女性的原理が支配していた。第2の段階は、大地と豊饒の女神デメテル的なもので、農耕の秩序が創設され、父は一定の地位を獲得したとはいえ、依然として女性の専制下におかれている。第3の段階は家父長制的なものである。第1の段階から次の段階への移行は、氷河の大異変を介して行われたとされる。『毛皮を着たヴィーナス』

でワンダは何度もくしゃみをし、風邪をひかないために毛皮を身にまとうのである。そしてさらに、マゾッホの三人の女性は三つの母性のタイプに対応する。まず、遊女を思わせる子宮的母親、第2に、乳を授け、死をもたらず口唇的母親、第3にエディプスの母親である。これらの母親像のなかで、第2の口唇的母親がマゾッホの理想像となる。

マゾヒズムにあって、父と母はどのような意味を持つか。精神分析によれば、マゾヒストに鞭をふるう女性の背後には父が隠れている。マゾヒストを苦しめるのは実際には父であるはずなのだが、それではあまりにも同性愛的であることが明らかすぎるという理由によって、母の代理である女性が選ばれるというのである。サディズムでは、父権の主題が存在するのは疑いがない。父が娘と結託して母を苦しめ、娘に母を殺させるというのが基本的な構図なのだ。精神分析は、サディズムとマゾヒズムが相互補足的なものだという前提に立っているから、サディズムにおいて父が支配的ならば、マゾヒズムでも父は重要な位置にいるはずだということになるのだが、ドゥルーズは、それでは鞭打たれるのは誰なのか、父はどこに隠れているのかを問う。そして、父は殴られるマゾヒスト自身のなかにいるのであり、鞭打たれ辱められるのはマゾヒスト内部の父のイメージそのものだと答える。マゾヒストが贖おうとする罪は、自分が父に似ていることである。

母の三重化(子宮的母親、口唇的母親、エディプスの母親)によって、父の機能はすべて象徴的に女のイメージへ転移され、父は排除される。ついで、すべての母性的機能が「良い母親」である口唇的母親へ圧縮される。マゾヒズムにおいては、売春という機能が「悪い母親」である子宮的母親やエディプスの母親によってではなく、貞潔で「良い母親」である口唇的母親によって遂行される。マゾッホにとっての理想的売春は、「良い母親」である自分の妻を契約のもとで、他人に身をまかせるように説得することである。それに対し、サドにおける普遍的売春は、母親の破壊と娘の選別にもとづく。

ここでドゥルーズは、「父の名」と象徴界の創設とを関連づけるラカンの理論に異議を唱えている。母親を自然の側におき、父が文明の原理としての法の体現者だというのは、分析的でない観念ではないか、と。だが、ドゥルーズは、象徴界から排除されたものは、現実界に幻覚として再出現するというラカンの表明した法則は受け入れている。そして、『毛皮を着たヴィーナス』の結末は、自分を排除した世界への攻撃的で幻覚的な父親の回帰を描いているという。マゾッホの『毛皮を着たヴィーナス』で父親の登場するところを引用してみる。

(…)だが、老いて病身の父に助けを求められたのである。

そこで私は故郷に帰って、ひっそりと暮しながら父の片腕となって二年間あれこれ父のわずらわしい仕事を手伝い、財産を管理し、これまでに知らなかったことを学んだ。すなわち《働き、義務を遂行すること》である。いまやさわやかな真水を飲んだように私は生き返った。それから父が死に、私が領地管理人となったが、そのことで取り立てて何ごとかが変わったわけでもなかった<sup>4)</sup>。

どうだろう？ここから、父の攻撃的で幻覚的な回帰が読み取れるだろうか。いっこうに幻覚的ではないし、「老いて病身の父」というところからは、むしろ攻撃性を奪われ去勢された父親像が浮かび上がってくる。この点ではドゥルーズの主張に同意することはできない。ドゥルーズはラカンの「排除」(forclusion)という概念を誤解している。ドゥルーズは、精神病を父の問題として考えるラカンに対して、母の次元での病因論を提起したいのであろうが、もちろん十分に展開されてはいない。

誤解は誤解として、ドゥルーズの議論を迫りたい。マゾヒストは父親の攻撃的な回帰から身を守

るために、「契約」(contrat)という手段に訴える。女性と契約し、ある時点、ある期間だけ、女性にすべての権利を譲渡する。そして、契約のもとで、マゾヒストは鞭打たれるが、そこで真の対象になっているのは子供ではなく父であり、マゾヒストは、父親がいかなる役割をも果たさない第二の生誕、単性生殖による誕生を体験する。

マゾヒズムの中心には、「幻想」(phantasme)があり、幻想の中心には口唇の母親がいる。『毛皮を着たヴィーナス』に出てくるギリシャ人に代表される、マゾッホの世界における第三者に関していえば、口唇の母親は子宮的母親の無名の第三者とエディプスの母親のサディスト的第三者に直面せざるをえず、第三者が必要とされるのは、「良い母親」である口唇の母親を子宮的母親およびエディプスの母親と置き換えることによって中性化されるためでしかない。マゾヒズムにあって本質的なものは口唇の母親と息子の関係なのである。

マゾヒズムでは、期待、すなわち快樂を待つことが重要な意味を持つ。そして快樂を可能にする条件として、苦痛を予期する。マゾヒストにとっては、夢をみることに、夢をみていると信じる必要があるのだが、サディストの場合は反対に、夢から醒めていることが必須なのである。また、マゾヒズムにとって「契約」が本質的なように、サディズムにおいては「制度」が本質的である。

それではサドとマゾッホは法に対してどのような態度をとるだろうか。両者ともに法に異議を申し立て、法を逆転することには変わりはないが、いわば戦略が異なる。サドはイロニーによって、マゾッホはユーモアによって法に対する。プラトン以来の古典的な法のイメージでは、法はより高次の原理である《善》に従属する。だがカントの『実践理性批判』以後、《善》が法に従属することになる。サドの「イロニー」は、より高次の原理をめざして法を超えるのだが、そこに見いだされるのは、《善》ではなく《悪》なのである。それに対してマゾッホの「ユーモア」は、法からその帰結へとむしろ下降する運動なのだ。罰として加えられる鞭打ちが逆に勃起をもたらすというように。

ドゥルーズが『毛皮を着たヴィーナス』から引用して、解釈している箇所がある。まずマゾッホからすこし長めに引用してみる。

彼女(ワンダ)は呼鈴を鳴らした。黒人女たちが入ってきた。

「手を背中で縛っておしまい」

私は膝をついたままで、なすがままに任せていた。それから黒人女たちは庭園を下って庭園の南の境界をなしている小さな葡萄園の方へ私を拉して行った。葡萄山の斜面の間には玉蜀黍が栽培されていて、ところどころにまだひからびた茎がひょろひょろと突っ立っていた。傍には一本の鋤が置いてあった。

黒人女たちはとある杭に私を縛りつけると、手に手に金色のヘアピンを持って私をつつきながら楽しんだ。しかしそれも長い間のことではなくて、やがてワンダがやってきた。頭には白貂の縁なし帽を被り、ジャケットのポケットに手を突っ込んでいる。彼女は私の縄をほどいてやるように言い、黒人女たちに命じて私の腕を背中にくくりつけさせ、首に軛の環を嵌めさせて鋤に結えつけた。

それからワンダの黒い女悪魔どもは私を畑の方に押し出し、一人が鋤を使うと、もう一人が縄を引っ張り、三人目が鞭で私を叱咤するのだった。そして毛皮を着たヴィーナスがその傍らに立ってそれをじっと見守っていた<sup>5)</sup>。

これをドゥルーズは次のように解釈する。「このテキストには、三つの母親のイメージの存在が三人の黒人女として再確認できる。だが口唇の母親は、一度目はごくありきたりの女としていまま

た系列中に姿をみせており、また二度目にはその系列から抽出され、他の女性たちの全機能を征服し、変形させ、再生の主題に奉仕させることで系列の総体を統轄するといったかたちで姿をみせており、だからそれは二重化されているというべきであろう。というのは、あらゆる要素が単性生殖に言及しているからである。葡萄と玉蜀黍との結びつき、あるいはディオニュソスの要素と女性的農耕共同体との結びつきがそうだ。母と一体化するものとしての鋤がそうだ。単性生殖を活性化するものとしてのヘアピンの攻撃と、それに続く鞭の殴打がそうだ。そして縄で引きたてられる息子の再生がそうである。三つのタイプの母のどれかを選択するという主題が一貫しているし、振幅運動と、勝ち誇った口唇的母亲に子宮的母亲とエディプス的母亲が吸収される現象も一貫している」<sup>6)</sup> 以上のドゥルーズの解釈は私には強引すぎてほとんど意味をなさないように思える。たったこれだけの描写から、三人の黒人女に三つのタイプの母親を読み取ることも不可能だし、ヘアピンの攻撃が単性生殖を活性化させるというのも無理がある。ドゥルーズはあまり読まれてこなかったマゾッホの作品をまず読まねばならないというわりには、解釈が恣意的で、マゾッホのテキストに忠実でないきらいがある。

ことにわかりにくいのは、「単性生殖」であるが、イエスのことを考慮に入れるといくらか理解できる。マゾッホには、第一のエピソードとして父に処罰されるカインがあり、第二のエピソードとしてキリストがある。ドゥルーズによれば、息子であるキリストを十字架にかけるのは母マリアなのだ。これがマゾッホ版の「神は死んだ」である。しかし処女である母は息子に第二の単性生殖による生誕としての復活を保証する。「単性生殖」とはイエスの復活になぞらえたイメージなのである。

マゾヒズムの中心には否認があることはすでに触れたが、マゾヒストの否認は三つある。母親にペニスを付与し理想化する否認、父を排除する否認、性的快楽と関連する否認である。

ついで精神分析がマゾヒズムをどう説明してきたかをドゥルーズは問題にする。性欲動と自我欲動の二元論にもとづく第一の解釈があり、「快感原則の彼岸」以後の、生の欲動と死の欲動の二元論にもとづく第二の解釈がある。ドゥルーズのテキストでは、「欲動」(pulsion)となるべきところが「本能」(instinct)となっているが、ドイツ語の《Trieb》を《instinct》と訳すのは現在では批判されており、《pulsion》(欲動)と訳すことになっているのでそれに従う。ただし「死の本能」についてはあとで触れる。一般的に理解されているかぎりでは、第一の解釈は、マゾヒズムはサディズムの反転によって生じた二次的なものと考え、第二の解釈は、「死の欲動」という概念の導入によって、一次的マゾヒズムの存在を認めたというものである。

マゾヒズムがたんなる自我へ反転させられたサディズムではありえない理由がある。まず、反転はリビドー的攻撃性の脱性愛化をとともなう。超自我あるいは良心の形成はエディプス・コンプレックスの脱性愛化によるのである。そしてマゾヒズムにおいては、エディプス・コンプレックスが息を吹き返し、超自我が再性愛化される。第二に、ある量的限度を超えた過程はすべて性欲動の興奮をもたらすという仮説がある。サディストが他者を苦しめることで快楽を感じるためには、サディストは苦しめられている対象に同一化して、苦痛と快楽の絆を味わっていなければならない。第三の理由として、自我への反転は、「私は自分を処罰する」(je me punis)という再帰的段階から、「私は誰かに処罰される」(on me punit)という受動的段階へ、「投射」を経て移行しなければならないということがある。以上のような理由で、マゾヒズムをサディズムの反転と理解するのでは不十分である。

フロイトの第二の解釈は、生の欲動と死の欲動、エロスとタナトスの二元論による。「マゾヒズムの経済的問題」という論文では、性愛的マゾヒズム、女性的マゾヒズム、道徳的マゾヒズムの三つの形態が区別されるが、ドゥルーズはこの区別は第一の解釈のうちにすでに存在していたと言っ

ている。

エロスとタナトスは結合した形でしか知られないが、この二つの欲動が分離することも想定できる。前者が「融合」(intrication)、後者が「解離」(désintrication)とよばれる。「エロスの役割は、タナトスのエネルギーを結びつけ、その結合をエスのうちで快感原則に従属せしめることにあるからである。それゆえ、エロスはタナトス以上に与件として示されるものではないにもかかわらず、すくなくともその声をあたりに響かせ、現実には顕著な影響を及ぼすものなのだ。だが、エロスに担われて表面まで導かれる底知れぬ深淵としてのタナトスは、本質的に口をとどしている。それだけに怖るるにたるものなのだ。だからこそ、フランス語では、この超越的で沈黙する審級を指し示すのに『本能』、死の本能という言葉をとっておくべきだと思われたのである」<sup>7)</sup>

それでは、エロスとタナトスの「解離」とはなにか。フロイトはナルシシズム的自我の構成と超自我の形成は、脱性愛化を含むことを示したが、この二つのケースにおいて、脱性愛化の意味は異なる。ナルシシズムの場合には、自我の想像力を構成する理想化のプロセスであり、超自我の形成においては、同一化のプロセスである。「解離は、自我と超自我との関連において、結合の内部で移動可能なエネルギーの形成のみを意味している」<sup>8)</sup>

快感原則の彼岸にあるのは「反復」である。サドとマゾッホにおいても反復が働いている。そして反復と快感はたがいに役割を交換し、反復は理想となり、快感は反復のあとを追う。そしてそこでは、死の本能が口をきくかにみえる。

自我と超自我の観点から考察しても、サディズムとマゾヒズムは非対称的である。サディストはあまりにも強力な超自我と同一化しており、外部の犠牲者という形でしか自我を持たない。一方、マゾヒストには超自我がかけており、自我が、外部に投射された超自我に対して勝ち誇る。サディズムは否定的なものから否定へと向かい、そのプロセスで超自我が機能する。マゾヒズムは否認から宙づりに向かい、そのプロセスで超自我から解放され、口唇的母亲にペニスを与えられ理想化される。

以上、ドゥルーズのマゾッホ論を検討し、マゾヒズムの問題について考えてきた。ドゥルーズの議論に対していくつかの批判を加えたが、ドゥルーズの目標、つまりマゾヒズムとサディズムの相互補足性という考え方を解体し、マゾヒズムとサディズムの非対称性を明らかにすることは、達成されていると認めうる。たとえばラカン派の分析科医である藤田博史の最近のマゾヒズム論<sup>9)</sup>を見てもわかるように、精神分析が依然として、たとえラカンのな装飾をまともにも、基本的には古い図式的なマゾヒズム論から脱却しきれないでいる現状からすれば、サドーマゾヒズムという実体の悪しき抽象性を暴き出しただけでも、ドゥルーズの仕事には意義がある。ドゥルーズはのちにガタリとの共著『千のプラトー』で、「器官なき身体」との関連でマゾヒズムをとらえることになるだろうが、それがはたして本質的な前進といえるかどうか疑問が残る。あくまで『ザッヘル=マゾッホ紹介』のドゥルーズを踏まえて、今後新しいマゾヒズム論が精神分析の立場からも提出される日が来ることを期待しつつ、本稿を閉じたい。

#### 註

1) Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch*, (以下PMと略す)、avec le texte intégral de *La Vénus à la fourrure*, les Editions de Minuit, 1967.

ただし本稿を書くにあたっては、「10/18」叢書(Union générale d'Éditions)におさめられているポケット・ブック版によった。

邦訳は、ジル・ドゥルーズ、『マゾッホとサド』、蓮實重彦訳、晶文社。

引用に際しては、邦訳に拠ったが、かなり手を加えた場合もある。全体として悪い訳ではないが、ただ精神分析用語などの訳が不正確で、たとえば「強迫神経症」が「偏執的ノイローゼ」になっていたりするのである。

- 2) P M, p.24, 訳書、p.36
- 3) P M, p.32, 訳書、pp.43-44
- 4) ザッヘル=マゾッホ、『毛皮を着たヴィーナス』、種村季弘訳、河出文庫、pp.222-223。訳文で傍点のついている部分は、《 》で示した。
- 5) 『毛皮を着たヴィーナス』、pp.158-159
- 6) P M, pp.95-96, 訳書、pp.119-120
- 7) P M, p.116, 訳書、p.143
- 8) P M, p.117, 訳書、p.144
- 9) 藤田博史、第5章「死の構造—マゾヒズムと死の欲動」、『性倒錯の構造』所収、青土社、1993

平成10年(1998)年9月14日受理

平成10年(1998)年12月25日発行

